発見！ ただみの文化遺産（たからモノ）

第６回

梁取の虚空蔵菩薩像（こくぞうぼさつ）

室町時代の貴重な文化遺産をどう守る

梁取の虚空蔵堂

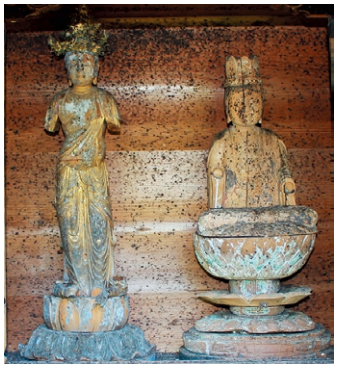
只見町梁取の成法寺の裏山を登ると岩窟（がんくつ）があります。そこには虚空蔵堂があり、２躯（く）（体）の虚空蔵菩薩像が祀（まつ）られています。室町時代後期と江戸時代初期の作で、只見町指定重要文化財です。

虚空蔵菩薩とは、虚空（宇宙）がすべてを蔵するように無限の智恵と福徳を人々に与える菩薩とされます。

▲岩窟の虚空蔵堂

文化６年（１８０９）成立『新編会津風土記』（梁取村）には、虚空蔵堂は村の北西、２町（約２２０メートル）の岩上にあり、成法寺の管理、建立時期は不明とあります。虚空蔵堂には正徳４年（１７１４）の鰐口（わにぐち）が懸けられています。現在の堂は文政元年（１８１８）の再建で、軒下（のきした）に二重の垂木（たるき）が並び、両側に組物（くみもの）と彫物（ほりもの）が装飾され、小さいながらも見事な仏堂建築です。

▲虚空蔵堂の二重垂木・組物・彫物



◀虚空蔵菩薩像　坐像と立像

虚空蔵菩薩像

２躯の菩薩像のうち、まず、虚空蔵菩薩坐像（ざぞう）は、室町時代後期、１６世紀前半の作です。宝冠（ほうかん）から頭・体まで一つの用材から彫り出された一木造（いちぼくづくり）で、足を交叉（こうさ）して坐っています（結跏趺坐（けっかふざ））。蓮華の台座は各段が一材から彫り出されています。両腕が失われていますが、本体から台座まで室町時代のものが伝来する例は少なく価値を高めています。素朴で愛らしい表情が見られ、旅をする行者系の仏師による作と考えられます。

▲坐像（室町時代後期）の顔容

次に虚空蔵菩薩立像（りゅうぞう）は、江戸時代初期、１７世紀前半の作です。透彫鍍金（すかしぼりとぎん）の宝冠をいただき、眼はガラスの玉眼（ぎょくがん）で、体は材を彫り出してはぎ合わせる寄木造（よせぎづくり）です。腕は取れて下に置かれています。顔の頬は緊張感があり引きしまった優美な表情で、腰をひねったポーズの立ち姿です。高い技術が見られ、中央の仏師の作と考えられます。

▲立像（江戸時代初期）の顔容

破損をくい止め保存措置を

虚空蔵菩薩像は４００年近く山上の岩窟で風雪に耐えてきましたが、湿気や虫食いによる損傷が著しく見られます。表面に見える多くの黒点はコウモリ糞の付着で、今後さらに付着してしまいます。美術的・歴史的価値の高い文化遺産が、現状のままでは損傷が進んでしまいます。それをくい止めるために、適切な施設で滅菌燻蒸（くんじょう）の文化財保護にもとづいた専門的な保存措置をしなければなりません。

岩窟から地域を見守ってきた仏像ですが、地域の方だけで仏像をお守りするのが難しくなってきた場合は、これ以上破損をくい止め、後世に伝えるために、公立博物館でお預かりする方法もあります。保存しながら拝観していただくのも公立博物館の役割です。

文：久野俊彦
写真：原永円香

ただみ・モノとくらしのミュージアム 展示情報

第２回企画展「生誕百年　皆川雅舟（がしゅう）展　只見が生んだ渾朴（こんぼく）の書人」

会期：２０２３年７月１１日（火）～２０２３年１０月９日（月・祝）
場所：ただみ・モノとくらしのミュージアム　展示ホール

入館無料

奥会津文化施設間連携企画展「奥会津の縄文」

会期：２０２３年７月２２日（土）～１１月１２日（日）
場所：ただみ・モノとくらしのミュージアム　ふれあいホール

ただみ・モノとくらしのミュージアム